

清・康熙期のチベット仏教導入

― チャンキヤ二世の台頭、登用の意義 ―

新藤 篤史

はじめに

清代の五台山事業、とくにチベット仏教に基づく寺院建立および改宗は、一七〇〇年代からチャンキヤ二世（一六四二―一七一四）^①の主導のもと、行われるようになったとされる。崔正森 [2000] によると、チャンキヤ二世は一七〇五年（康熙四四年）に五台山において菩薩頂を含めた一〇ヶ寺をチベット仏教寺院に改め、また鎮海寺、普樂院、財善洞、廣化寺、文殊寺、金剛窟の六ヶ寺を管轄するようになったという。^② 張元 [2011]

は、チャンキヤ二世による五台山事業の開始を一七〇一年とし、羅睺寺、寿寧寺、三泉寺、玉花池、七佛寺、金剛窟、善財洞、普寧寺、台麓寺、涌泉寺の一〇ヶ寺をそれまでの「漢地佛教寺廟」から「格魯（ゲルク）派寺廟」^③に改めたとしている。^④ そして、両研究はともに、その頃から五台山のチベット仏教がダライラマ派とチャンキヤ派に二分されたとしている。

筆者は、これらの研究で、五台山のチベット仏教がダライラマ派とチャンキヤ派に二分されたことについては、史料の根拠に乏しい説である

と指摘した⁵⁾。そもそも、ダライラマ派とチャンキヤ派とは何なのか。ダライラマもチャンキヤも、ともにチベット仏教のゲルク派の僧であり、またチャンキヤ二世はダライラマ五世の弟子筋にあたる。しかし、何らかの歴史的背景から、このような現象が生じたのかもしれない。本稿では、『清涼山志』⁶⁾と『チャンキヤ二世自伝』⁷⁾(C2N)に基づき、チャンキヤ二世と五台山の關係について、そして一七〇六年に「国師」の称号を与えられるまでのチャンキヤ二世の動向について明らかにし、清の康熙期におけるチベット仏教導人がどのようにして行われたのかを考察していく。

一、清の対モンゴル・チベット政策におけるチャンキヤ二世の台頭（一七〇〇年）

一・一、チャンキヤ二世の出自について

まず、チャンキヤ二世がどの時点、如何なる

経緯で、清との関わりをもつようになったのかを探っていこう。とくに本稿は、チャンキヤ二世の五台山事業に関する疑問に端を発しているので、ここでは『清涼山志』「高僧懿行」にある「章嘉國師傳」に基づき、チャンキヤ二世の経歴を辿っていくことにする。詳細な部分は、C2Nと池尻「2013」を参照し、さらにチャンキヤ二世の輪郭を際立たせていく。

清章嘉呼土克圖、西藏人。生有異徵、不迷本性、相傳爲達賴第二世呼畢勒罕轉生。種種異徵、眾所欽企。幼育于寺、乃居第五世達賴弟子。清康熙時、寰宇載寧、重譯來朝。聖祖晚歲、頗耽禪理、屢諮法典、歎爲玄識。特錫灌頂普慧廣慈之號、命主蒙古多倫泊臯宗寺。章嘉博貫宗教、梵行精純、諦義圓妙。西藏蒙古諸王、尤相崇信、多所歸依。

『清涼山志』（卷三、高僧懿行、章嘉國師傳、四〇頁）

『清涼山志』に「清の章嘉呼土克圖」^{チヤンキヤホトケツト}と記されているチャンキヤ二世は、「西藏人」とされ、「生まれながらにして異なる徴を有し、本性に迷わなかつた」とされる。「呼土克圖」とは、「福のある御方」や「聖者」の意味を持つモンゴル語の「qutuytu」のことであり、清においては高僧に贈られた称号でもあった。生まれは、C2Nによると青海湖の東に位置するツォンカのイゲ（gyi dge）という地方に属するタチュク村（*rita phyug*）であったという。^⑥一六四二年のことであり、この年は、チベットでダライラマ五世を戴くガンデンポタン、いわゆるダライラマ政権が発足した年でもあった。

『清涼山志』には「相傳爲達賴第二世呼畢勒罕轉生」とあるが、これは誤解を生じさせる記述でもある。つまり、文をそのまま受け取ると、チャンキヤ二世はダライラマ二世の転生者ということになり、これが罷り通るには、いくつか

の矛盾が解消されなければならない。そもそも、ダライラマ二世の転生者はダライラマ三世でなければならず、すでにダライラマ五世が即位している世で、なぜこのような話が持ち上がったのか。そして、またなぜ清はこれを『清涼山志』に記したのであろうか。

「呼畢勒罕」^{ホビルガン}とは、「化身」の意味を持つモンゴル語の「qubliyan」のことである。次元を異にする存在が仮の姿でこの世に現れた状態のことをいい、高僧の中でも最高級の僧が具える特性ともいえる。^⑦「qutuytu」と同様に、清においては称号の一つとして『大清会典』にも明記されている。^⑧「qutuytu」との区別は曖昧なところもあり、両者とも由緒ある寺院の座主のように、転生によって系譜が続く高僧などに贈られることが多い。しかし、「章嘉國師傳」での「呼畢勒罕」が本来の「qubliyan」の意味を持っていたかどうかは分からない。チベット仏教において、「化身」や「転生」は厳密な制度に基づいているので、

例えば由緒ある寺院を座主として継承するならば、それなりの格式を持った僧によって認定されなければならぬ。清はそれを追認するのみであった。

では、チャンキヤ二世は誰から転生認定を受けたのであろうか。『清涼山志』には、チャンキヤ二世の転生認定に関する記述は見当たらない。C2Nによると、後にチャンキヤ二世と呼ばれることになるゲンドウンキャブ (dge 'dun skyabs) という少年が、生まれながらに才知に優れていたため、パンチェンラマから「タクパ・ウーセル (grags pa 'od zer, ?—一六四一) の転生者」に認定されたという。タクパ・ウーセルは、現在の青海省互助土族自治県(五十郷灘村)にあるグンルン寺 (dgon lung byams pa gling) の座主であった。そして、タクパ・ウーセルが「チャンキヤ」という村の出身であったため、その転生者に認定されたゲンドウンキャブはチャンキヤ二世と呼ばれるようになり、さらにはグンルン

寺に住持することになった。一六五二年、チャンキヤ二世はツォンカでダライラマ五世に謁見した⁽¹²⁾。この年は、ダライラマ五世が順治帝の招請によって北京を訪れた年でもあり、おそらくダライラマ五世は北京へ向かう途中でツォンカに立ち寄ったのであろう。

C2Nによると、その後、チャンキヤ二世はグンルン寺で学び、一六六一年からはチベット⁽¹³⁾のラサに留学している。ラサではデペン僧院 (bras spungs dgon pa) の「トマン学堂 (sgo mang grwa tshang) に入った。これは青海地方を含むアムド (a mdo, 東北チベット) の留学僧が倣う正規のルートでもあった⁽¹³⁾。そして、チャンキヤ二世は一六六四年の二三歳の時、ダライラマ五世から具足戒を授けられ、正式な僧となった⁽¹⁴⁾。『清涼山志』に「乃居第五世達頼弟子」とあるのは、このことを示しているのである。

その後の『清涼山志』におけるチャンキヤ二世の経歴は、実に簡略なものとなる。「清康熙時、

寰宇載寧、重譯來朝」とあるように、一六八七年にチャンキヤ二世が初めて北京を訪れるまでの二十数年がたったの一文である。その間には、康熙帝による二回の五台山巡幸（一六八三年に二回）や、五台山寺院の建立・改宗が実施されている。よって、清代から「十大黃廟¹⁵」と呼ばれている五台山のチベット仏教寺院のうち、一六八七年以前に建立・改宗が確認できる菩薩頂、羅睺寺、寿寧寺、台麓寺については、少なくともチャンキヤ二世が手掛けたものでないことが分かる。

一・二、チャンキヤ二世の北京「來朝」の経緯

「來朝」すなわちチャンキヤ二世による北京初訪問についてであるが、ここにはモンゴル・チベット・清の関係においてきわめて重要な経緯が含まれている。発端は、現在のモンゴル国にあたるハルハの内紛であった。これを解決するため、一六八六年にフレンベルチルの地で会盟

が行われた。この会盟は、康熙帝の発案で開催され、チベット側からもダライラマ五世の名代が調停役として出席した。

会盟の席には、ハルハ側の護法者（見届け人）として高僧ジェブツンダンパ（一六三五一七二三）¹⁶も出席していた。そして、この会盟の席においてジェブツンダンパは、ダライラマ五世の名代に対して席の高さを同じにするなど対等な振る舞いを見せたという。この行為に対して、西モンゴル・ジュンガルの首長ガルダンは、ジェブツンダンパの非礼を責め、ついにはハルハに侵入した。ジュンガルはチベットにおけるダライラマ政権の施主国の一つであり、ガルダンはダライラマ五世からボショクト・ハーンの称号を授かり、さらには師弟の関係も結んでいた。このガルダンのハルハ侵入によって、ハルハは清に帰順し、対立の構造はジュンガルと清という形になった。

ところで、渦中のダライラマ五世の名代とは、

ガルダンシレトウと呼ばれるガワン・ロドウー・ギャンツォ（一六三五―一六八八）¹⁷のことであり、チャンキヤ二世にとつてはラサ留学におけるゴマン学堂入門以来の師であった。そして、チャンキヤ二世も、師に随行してフレンベルチルの会盟に参席していたとされ、会盟後の一六八七年には、師とともに北京を訪れ、康熙帝に謁見している。これが『清涼山志』に「來朝」とあるチャンキヤ二世による北京初訪問の経緯である。続く『清涼山志』の記述は「聖祖晩歳」となるので、『清涼山志』においては、もはやチャンキヤ二世の北京初訪問についてはもちろん、チャンキヤ二世と清の関係が具体的にどのようにして生じたかについては不明である。そこで、ここからは主にCZLに基づき、チャンキヤ二世の経歴を辿ることにする。

一六八七年の北京初訪問時、チャンキヤ二世は、師ガルダンシレトウによる新年の大祈願会および康熙帝との二回の接見に随行したとされ

る。康熙帝との接見の際、チャンキヤ二世は康熙帝に気に入られ、このまま北京に留まるよう指示されたという。しかし、チャンキヤ二世はこれを辞退して、師とともに北京を後にした。¹⁸ガルダンシレトウは、一六八八年、チベットに戻る途中の青海のクンブム寺付近で死去した。その後、チャンキヤ二世は青海に留まっていたが、一六九三年に康熙帝から北京への招請があり、再び北京に赴くことになった。

北京に到着したチャンキヤ二世は、「宮殿内」のすべての「大ラマ」によって出迎えられたという。そして、滞在中は、当時の扎薩克大喇嘛の長であったメルゲン・チュージエーをはじめ、京師の名だたるラマから講義や生活の支援を受けることになった。これらは康熙帝の指示によるものであり、また康熙帝自身もチャンキヤ二世の滞在場所を訪問し、チャンキヤ二世が移動する際には、直接その手を取って自ら案内するという厚遇ぶりを見せた。²⁰ちなみに、妙舟『蒙

蔵仏教史』には、この一六九三年のチャンキャ二世による北京訪問の際に、チャンキャ二世が扎薩克大喇嘛の職を受けたとあり、これを根拠に多くの研究がチャンキャ二世はこの時点で扎薩克大喇嘛の長に任命されたとしている。しかし、池尻 [2013] は、CAN にチャンキャ二世自ら扎薩克大喇嘛の任命を受けたことを記していない点や、この時期の扎薩克大喇嘛の長としてメルゲン・チュージェーの名を記している点から、一六九三年にチャンキャ二世が扎薩克大喇嘛の職を受けたという説は、後世のチャンキャ二世の絶対的な地位から生じた誤解としている⁽²¹⁾。ところで、チャンキャ二世はどのような経緯から北京に招かれたのであろうか。

まず、清によるハルハ統治を正式に決定づけた一六九一年のドロノールの会盟があげられる。ドロノールは、現在の内モンゴル自治区シリングゴル盟に位置し、かつてフビライが夏の都である上都を築いた地であった。康熙帝は、

この会盟において、帰属したハルハの首長たちに正式に臣下の礼をとらせた。さらに、ここで清に求められたのは、統治下の多くのモンゴル人に対して彼らが信奉するチベット仏教の指導者を用意することであった。

また、池尻 [2013] が指摘しているように、一六九二年、北京のチベット仏教界の頂点にいたイラゴクサン・ホトクトがジュンガルのガルダン側へ逃亡するという事件が起きた。イラゴクサン・ホトクトは処刑されることになったが、これによって清は北京のチベット仏教界において最も求心的な存在を失ったことになる⁽²²⁾。すなわち、一六九三年におけるチャンキャ二世の北京招請には、ハルハ統治によってチベット仏教の指導者が求められるという状況と、そのチベット仏教の指導者が北京において失われるという状況が絡んでいたのである。

一・三、チャンキヤ二世の清における事績、辺境政策
とラサ遣使

一六九六年、チベットのダライラマ政権の摂政サンゲ・ギャンツォがダライラマ五世の死を十六年にも亘って隠匿していた事実が発覚した。翌年、チベットのラサで、それまで公表されずにいたダライラマ六世の即位式が執り行われることになった。清は、この即位式にあたって、金冊と金印を贈る使者としてチャンキヤ二世らを派遣した。ところで、このチャンキヤ二世らによるラサ訪問には、即位式への列席とは別の任務が途中で加わるようになった。それは、ラサへの往復路における青海地方で、青海の首長たちに対して康熙帝への入覲を促すというものであった。⁽²³⁾そして、この任務は、青海の首長たちと通じていたチャンキヤ二世によって円滑に進んだとされる。⁽²⁴⁾

このように、清はフレンベルチルの会盟以降のジュンガルとの対立の中で、モンゴルと同様

に青海地方においても懐柔工作を行っていたのである。その際、モンゴル人が伝統的に信奉するチベット仏教の僧で、しかも青海の大寺院クンブム寺の座主であったチャンキヤ二世が、キーパーソンとして最適であったことは想像に難くない。

それを示す出来事として、チャンキヤ二世の「ホトクト」号の剥奪および復帰という事件がある。一六九九年、チャンキヤ二世は、一六九七年一六九八年のラサ訪問の際に摂政のサンゲ・ギャンツォに謁見したことによって「ホトクト」号を剥奪されることになった。実は、サンゲ・ギャンツォは、ダライラマ五世の死を十六年にも亘って秘匿していたことよって康熙帝の怒りを買っていたのである。⁽²⁵⁾しかも、清と対立していたジュンガルの首長ガルダンと通じていたことも明るみになっていた。そのような状況下、チャンキヤ二世らは康熙帝の旨に背いてサンゲ・ギャンツォに謁見したのである。一時は、絞首刑まで話が

進んだとされるが、この事件は結局のところ数ヶ月後に放免、チャンキヤ二世には再び「ホトクト」の称号が贈られることになった。⁽²⁶⁾

なぜ、チャンキヤ二世は、こうもあっさりとその罪を許されることになったのか。おそらく、清にとつてこの処罰にも勝る何らかの見返りがチャンキヤ二世にはあつたのであろう。確かに、この時期には、それを窺わせる清の諸政策が行われていた。一六九七年、ジュンガルの首長ガルダンが自害し、清とジュンガルの戦いは一区切りついた。以降、清は次第に国内の様々な問題に直面していくことになる。ドロンノールの会盟によつて統治したハルハへの対応。ジュンガルとの戦いの影響によつて清の領内にはモンゴルの難民が大勢いたとされる。⁽²⁷⁾そして、ジュンガルの戦いによつて焦土と化した領地の復興も早急に行わなければならなかった。

一六九八年、康熙帝はそのような状況の下、ハルハの高僧ジェブツンダンパとともに五台山

を巡幸した。康熙帝にとつて、この三回目の五台山巡幸は、二回目から十五年も隔たつていた点、またガルダンの死の翌年であつた点、さらにジェブツンダンパが同行していた点などから、それまでの過去二回の巡幸とは、まったく別の意味合いがあつたように思われる。それは、あたかもハルハとの関係をチベット仏教に基づいて構築しようという宣言にも等しかった。⁽²⁸⁾

この頃の清によるチベット仏教導入の特徴は、ダライラマを介さずに、例えばチャンキヤ二世という「清のホトクト」としてのチベット仏教僧や、ジェブツンダンパという「モンゴルのチベット仏教僧」などによつて行われていたところであろう。その理由としては、ダライラマの権力が空白状態にあつたことがあげられる。というのも、一六九七年に即位したダライラマ六世は、放蕩生活に明け暮れ、執政らしい執政もせず、一七〇二年には沙弥戒を返上、一七〇六年にはダライラマ位を廢位させられ、さらには

北京へ護送される途中で死去したのである。また、六世の転生者である七世が青年期に達して親政を行うまでには、まだかなりの時間が必要であった。⁽²⁶⁾つまり、ダライラマの介入を望んでも、それが叶わない状況があったのである。しかし、そのことがチャンキヤ二世やジェブツンダンパに、後世に名僧と謳われるような下地をつくらせたことも確かである。

二、「国師」チャンキヤ二世となるまでの事績（一七〇〇年～）

二・一、チャンキヤ二世による五台山事績の検証

C2Nによると、チャンキヤ二世は一七〇〇年に康熙帝の委託によって五台山に入山した。前年のチャンキヤ二世がサンゲ・ギヤンツォとの会見の罪を異例の早さで許された理由も、もしかしたらここにあったのかもしれない。

庚辰年⁽³⁰⁾ (dpa' bo'i lo, 一七〇〇年、康熙三十九年)、「清から」グンルン大寺院 (dgon klung chos sde che) に、神変大祈願会 (cho 'phrul smon lam chen mo) を開催する費用を授かった。

皇帝 (康熙帝) がお造りになられた三部主像 (rigs gsum ngon poi sku, 觀世音、文殊、持金剛) を、文殊菩薩の聖地である五台山に招致し、スンシユク (gzungs gzhus)⁽³¹⁾ を献じて落慶法要を行うため、「私 (チャンキヤ二世) は」皇帝が委託した通りに五つの峰に赴き、それらを安置して拝礼した。その時、見事な輝かしい色合いの虹が見えた。聖地において信仰と歓喜を認識した出来事であった。(C2N, 23b)⁽³²⁾

* () は前語の説明や原文。「」は補足。ともに記入は筆者。

では、チャンキヤ二世による五台山寺院の大規模な建立・改宗が一七〇〇年から始まったの

かという点、実はCN2における五台山に関する記述はこれ以外に見当たらない。そればかりか、崔正森 [2000] も張元 [2011] も、チャンキヤ二世の五台山事業に関しての典拠を明確に示しているわけではなく、その観点からいうとチャンキヤ二世が実際に五台山事業を行ったかどうかは不確かなものとなる。

そこで、『五台县志』に「チャンキヤ・ホトクト系統に属するチベット寺院としては鎮海寺、普樂院、集福寺、文殊院、広化寺、慈福寺の六ヶ所があり、よってチャンキヤラマが管轄し、「チャンキヤ自身は」鎮海寺に駐留した⁽³³⁾とあるように、歴代のチャンキヤ・ホトクトが住持したとされる鎮海寺を手掛かりに、チャンキヤ二世による五台山への具体的な関与について探っていこう。

鎮海寺は、五台山中枢の台懷鎮から南へおよそ五〇〇メートルのところ⁽³⁴⁾に位置する。明代の創建とされ、敷地はおよそ一六二〇平方メートル

ル、前院（文殊殿）、後院（大佛殿）、南院（天王殿）の三部分で構成されている。この様式は康熙年間の重修とされるので、鎮海寺に住持していた歴代のチャンキヤ・ホトクトの中ではチャンキヤ二世の時代にあたることになる。南院すなわち天王殿内部の「正脊坊下」には「大清康熙四十九年歲次庚寅孟夏吉日旦、勅封清修禪師乃提督五台山番漢大喇嘛鼎增監錯奉旨重建、住持朋錯垂旦謹志（*傍線は筆者が記入）」との題辞があるとされる⁽³⁵⁾。

清修禪師の鼎增監錯とは、当時の菩薩頂座主であり、すなわち五台山寺院のすべてを管轄する「五台山菩薩頂扎薩克大喇嘛」であった。阿王老蔵から始まる歴代の菩薩頂座主は、初代から六代までが北京の崇国寺の出身であり、第四代の鼎增監錯もその系統に属していた⁽³⁶⁾。ちなみに、第三代の老蔵丹巴は、一六九四年に『清涼山新志』を編纂した僧であり、一六九八年には五台山巡幸をしていた康熙帝によって清修禪師

に封じられた。

老蔵丹巴の事績をみると、菩薩頂の大規模な重修に始まり、台麓寺の建立、そして望海寺、普濟寺、法雷寺、演教寺、靈応寺といった五頂寺院の重修、また殊像寺や碧山寺なども重修している。一七〇五年には菩薩頂で金製の文殊菩薩像、観音菩薩像、普賢菩薩像の三大士像などの建立、一七〇〇年と一七〇五年には菩薩頂と台麓寺でラマ達と梵書と藏経を学んで研究したとされる^⑧。つまり、チャンキヤ二世の五台山入山時、すなわちCZ^⑧において最初に入山したとされる一七〇〇年も、崔正森「2000」のいうチャンキヤ二世が五台山寺院の建立・改宗を始めた、とされる一七〇五年も、実際の五台山事業は、チャンキヤ二世ではなく北京の崇国寺系の僧が行っていた可能性が指摘できるのである。しかも、歴代のチャンキヤ・ホトクトが住持していた鎮海寺も、一七一〇年の重修は崇国寺系の鼎増監錯によって行われたという。その時に住持

していたとされる朋錯垂旦は、チベット語でおそらくポンツォ・チューデンかと思われるが、チャンキヤ二世Ⅱガワン・ロサン・チューデンと同一の僧であったかは分からない。以上を考慮すると、チャンキヤ二世による五台山寺院の建立・改宗については、チャンキヤ二世が実際に行ったかどうかとも怪しくなってくる。

二・二・二 モンゴル諸集団への灌頂授与の意義

少なくとも、一七一〇年までの五台山事業が北京の崇国寺系の僧によって行われていた場合、その間のチャンキヤ二世の事績とは一体どのようなものであったか。一七〇六年、清はチャンキヤ二世に対して「国師」の称号を贈っている。つまり、チャンキヤ二世には、清に対してそれ相応の貢献があったことになる。しかも、「国師」となったからには、少なくとも実際に五台山事業を行っていた崇国寺系の僧とは別の何かが、チャンキヤ二世にはあつたはずである。そこで、

ここからはC2Nに基づいて、「国師」の称号を得るまでのチャンキヤ二世の事績を検討していくことにする。

辛巳年 (khyu mchog lo, 一七〇一年、康熙四〇年)、ハラチン (har chin) の公 (kung) チャンパ・タシ (byans ba bkra shis) としつ者が、皇帝に対するシャプテン⁽³⁷⁾ (zhabs brtan) のために寺院を多く建立したといので、儀礼上のスンシユク (gzungs gzlug) および落慶法要を行う者として、「私(チャンキヤ二世)は」皇帝にお願い申し上げて、「チャンパ・タシによつて」呼ばれた地(ハラチン部の遊牧地)に赴き、それらを完成して、公(チャンパ・タシ)が首長となる、その地の支配者層の男女および貴族と、ラマおよび多くの随行者すべてに、灌頂、指南、誓言と、優婆塞戒および出家戒などを、それぞれの求めに応じて授けた。(C2N, 24a)⁽³⁸⁾

この引用文には、清とモンゴルの繋がりがチベット仏教の儀礼に基づいている場合の一例として、その関係構築の手順の一端が窺える。すなわち、モンゴル側の要請で清皇帝の長寿儀礼をチベット仏教に基づいて行うという手順である。そして、その際のダラニ封入および落慶法要を行う者が、チャンキヤ二世であったことはきわめて重要である。このモンゴル・ハラチン部の場合では、チャンキヤ二世の招聘に伴う諸儀式、多くの聖俗に対する灌頂、指南、誓言、授戒が注目される。とくに灌頂については、これを行える僧となれば限られ、例えばチベットの名だたる高僧のもとで二十年にも亘つて修行を積んだチャンキヤ二世のような僧でなければならなかった。

灌頂とは、密教の入門儀礼であり、端的にいうとある特定の經典に基づき修行の許可を意味する。儀式では、灌頂を授ける側がその特定の

經典における本尊と一体化したような状態になり、そして受ける側はその本尊のもとで修行を開始する。石濱 [2011] によると、「灌頂儀礼はそれ自体に政治的な意味はないものの、灌頂を授ける師僧が高僧であり、かつ受者が国王クラスである場合、国王が灌頂を受けた後に弘法に勤しみ結果として社会が大きく変化するため、歴史的な事件とみなされるようになる」という。³⁹⁾ とかく信仰という曖昧な言葉で表現されがちな仏教僧とモンゴル人の関係も、灌頂の一語によると、その繋がりは明確なものとなる。つまり、ここでは清側のチャンキヤ二世とハラチン部の有力者たちが灌頂によって強固に結ばれたということになる。

二・三、ドロンノール彙宗寺の興隆と「国師」号の授与
つづくチャンキヤ二世の手掛けた事業とは、ドロンノールの彙宗寺における活動に他ならなかった。一七〇一年、康熙帝はドロンノールの

地に、「内の大八旗、外の大四九旗、ハルハ、オイラート」すなわちマンジュ人とモンゴル人の利益のための寺院、彙宗寺を建立した。さらに康熙帝は、その彙宗寺において、扎薩克大喇嘛のすべての統轄者としてチャンキヤ二世を指名した。⁴⁰⁾

翌一七〇二年から、チャンキヤ二世は、彙宗寺において学僧の指導にあたった。CAN には、その指導の様子が段階的に記されている。段階的とは、まさしく初歩的な「道に適った行」(grigs lam kun spyod) や「集団で念誦する方法 (tsilogs 'don byed tshul)」などの実践から、それこそ究極的な灌頂儀礼⁴¹⁾までの過程である。それが数年に亘って、彙宗寺の発展とともに略述されているのである。特別な法要や指導の際には、外部から専門家や指導僧などが招聘された。トゥクダム (thugs dam) /ラムリム指南 (ram rim khrid) など、その都度、彙宗寺が盛大になっていく様子が手に取るように分かる。さらには薬学や医術など

も導入されたようで、次の引用文からは、それらが儀礼に伴って施された様子が窺える。そして、トウクダムという法要が、北京の高僧ジェドゥン・リンポチエによって行われたことが確認できる。

その時、病気が流行するのを防ぐために、感染した者に対して、内部と外部から集まってきた僧衆と、ペルサン・カブチュ (*dpal bzang ka bcu*) など、それにつづく多くの支援者たちが、ジェドゥン・リンポチエ (*rje drung rin po che*) のトウクダム (*thugs dam*) を明確に信奉するという法要において尽力し、シエタル (*shedra*) およびルンギヤム (*lun rgyam*) の二人を「病気に感染した者の」傍らに留まらせてから、看護師が衛生学 (*phrod rten*)、シエタルパ (*shes dar pa*) が法要 (*rim gro*) などの準備に伴う運搬作業をとくに勤しんで行った。

ナムゲル・カブチュ (*rnam rgyal ka bcu*) が皇帝のおみ足に進んで礼を尽くして申し上げるには、薬と医師らが恩恵を施してくれたので「病気に感染した者が」病気から良く解放されたということである。(C2N, 24b)⁽⁴³⁾

トウクダムとは、高僧による瞑想状態のことを指すが、時に高僧が死去した後にミイラ化し、まるで瞑想している高僧に対するようにその対象に拝礼するというきわめて高度な法要である。ジェドゥン・リンポチエは、ゲルク派の創始者であるツォンカパの弟子にまで転生譜を辿れる由緒ある僧で、この僧もチャンキヤ二世とともに彙宗寺の指導にあたっていたことが分かる。そして一七〇四年、チャンキヤ二世は、彙宗寺において「内外の多くの者 (*gzhi byes mang po*)」に、ヴァジラバイラヴァ (*rdo rje jigs byed*) の灌頂⁽⁴⁴⁾を授けた⁽⁴⁵⁾。ちなみに一七〇四年の記述には、

彙宗寺の管理体制のようなものが見出せる。例えば、寺院における各種講義、法要等、茶や賄いは寺院以外の提供者の存在によって実施される場合があったこと、また土地の管理については明代の寺荘を思わせる体制であったなどが窺える。

〔チャンキャ二世は〕教えの根本たる三事 (gehi gsum) の実践を確立した。僧衆などに盛大に何時も施している、チャツル (a tshul, 茶の作法) とトゥクツル (thug tshul, 麵料理の作法) を執り行う者を寺院 (彙宗寺) から出し、また祈願会 (smon lam)、夏安居 (dbyar gnas)、五供節 (Inga mchod)、そしてチャトウク (ja thug, 茶と麵料理) を煮る者を提供する者が他に現れた時は、その管理をし、未来において有益になることを考えてから、公用地の二人の管理人を任命して、公共財物、基金として勇壯な牡馬一二〇頭および羊三〇〇頭と、シルクの着物、カタ、

迎賓用の器、褥など、細かい必需品および函と、大きな馬を飼育する者一人とともに与えた。寺院の僧団には仏を供養する際に伴う基金を加えた。(C2N, 26b)⁴⁶⁾

こうして、ドロンノールの彙宗寺は、発足時のいわば初等教育を行う場から段階を経て、周辺のマンジュ人、漢人、とくにモンゴル人を結びつける機関として、さらにはチベット仏教導人の中心地として発展を遂げていたのである。そして一七〇五年、彙宗寺を訪れた康熙帝⁴⁷⁾の眼にチャンキャ二世の姿はどのように映ったか。答えは、翌一七〇六年の「灌頂普善広慈大國師 (Kwon ting ph'u shan kwong tshi ta ko shi)」の称号の賜与によって表れているのではなからうか。

おわりに

清代の五台山事業に、チャンキャ二世はどこ

まで関与していたか。従来の研究では、チャンキヤ二世は、一七〇六年に「国師」となつてから五台山に入り、五台山寺院の大規模な建立・改宗に着手したことになる。その際、チャンキヤ二世は鎮海寺に住持し、鎮海寺を含めた普樂院、財善洞、廣化寺、文殊寺、金剛窟の六ヶ寺を中心に一連の建立・改宗を行ったとされる。そして、五台山は、チャンキヤ派とダライラマ派の二大勢力に分かれていったという。

しかし、CZJによると、チャンキヤ二世は「国師」となつてからも依然としてドロノールの彙宗寺で活動を続けていたようである。というよりも、CZJにおける五台山に関する記述は、一七〇〇年に康熙帝の委託で三部主像を安置したこと以外に見当たらないのである。しかも、歴代のチャンキヤ・ホトクトが従事していた鎮海寺でさえ、一七一〇年の時点では北京の崇国寺系の僧によって管轄されていたようである。おそらく一七〇〇年代や一七一〇年代は、この

崇国寺系の僧が菩薩頂扎薩克喇嘛として五台山寺院の建立・改宗を手掛けていたのであろう。とすると、チャンキヤ二世による五台山事業はもはや限定的であつた可能性すらある。

清におけるチャンキヤ二世の主たる事績とは、おそらくドロノールの彙宗寺における活動に他ならない。その彙宗寺で、周辺のマンジュ人、漢人、とくにモンゴル人を一から指導し、段階的にチベット仏教の教義やそれに関する技術等を導入していったのである。とくに帰属したばかりのハルハのモンゴル人にとっては、ドロノールの彙宗寺の存在は大きかつたと思われ、そのことはチャンキヤ二世が清の対モンゴル政策に大きく貢献したことを意味している。例えば、この場合の清とモンゴルの繋がりの一例としては灌頂があげられ、その灌頂を行なえたチャンキヤ二世は、それまでの清に属していた僧とは一線を画する存在であつたかと思われる。

ところで、五台山寺院がチャンキヤ派とダラ

イラマ派とに二分されたことについては、以上のチャンキヤ二世の台頭と、当時の清とチベットの関係から次のような推測が立てられる。チベットの摂政サンゲ・ギャンツォが十六年に亘ってダライラマ五世の死を隠匿し、しかもジュンガルのガルダンと繋がっていたことは、清にダライラマ政権に対する不信感を抱かせるに十分であった。そこへダライラマ七世の幼少期が重なり、おのずとチャンキヤ二世への比重が高まったのであろう。

このような清によるダライラマ政権に対するある種の不信と、チャンキヤ二世に対する依存の要素は、『清涼山志』「高僧懿行・章嘉國師傳」に記された「相傳爲達賴第二世呼畢勒罕轉生」によっても表されている。これは、ダライラマの転生が成立したダライラマ三世⁽⁴⁹⁾にまで遡り、その前世すなわちダライラマ二世をチャンキヤ二世に繋げることによって、ダライラマ政権に対するチャンキヤ二世の優越性を示そうとした

ものに他ならない。もちろん、この転生は正規のものではないが、清のチベット仏教界がチャンキヤ二世を中心に新たな領域に入ったことは確かである。

註

- (1) ガワン・ロサン・チューデン・ペルサンポ (ngag dhang blo bzang chos ldan dpal bzang po, 一六四二—一七二四)。チャンキヤは、ダライラマ、パンチェンラマ、ジェブツンダンバに並ぶ著名なラマ(高僧)である。第三代の転生者チャンキヤ三世は乾隆帝(一七二一—一七九九)の金剛阿闍梨として清において絶大な権力を手にしたという。
- (2) 崔正森 [2000] 七四五頁、七五二頁。
- (3) ゲルク派とは、チベットで第二のブツダと称されるツォンカバ(一三五七—一四一九)が創始した宗派。黄帽派とも称される。ちなみに歴代ダライラマはゲルク派に属する。
- (4) 張元 [2011] 一四頁。
- (5) 新藤 [2017]。
- (6) 時代ごとに編纂された五台山に関する文献。名所の位置、寺院の解説、名士の参詣に関する逸話、歴朝皇帝による事績等を網羅的に掲載。本稿では「乾隆二十年重刊本」を使用。これは明の鎮澄が著した『清涼山志』に清朝前期の事績を加えたもの。

- (7) チャンキヤ二世自ら著した同時代史料。自身の修行期間、清における事績が詳細。記録はチャンキヤ二世の死の前年一七二三年で終わっている。本稿では、十九世紀に北京で出版された、いわゆる北京版を使用。
- (8) C2N, 3b。
- (9) ダライラマ五世は観世音菩薩の化身とされ、そのためチベットにおける現世の補陀落すなわちラサのポタラ宮の主となることができる。菩薩は有情の利益ために涅槃に入らず転生し続けると伝えられているため、ダライラマの転生とは厳密にはこの菩薩の特性による現象ということになる。
- (10) 乾隆『大清会典』巻八十、理藩院、典属清吏司、喇嘛条。
- (11) 歴代パンチェンラマは、チベットではダライラマに次ぐ宗教的権威である。ダライラマの空位時や幼少期には、代わりに実権を握ることもある。本来は、ゲルク派四大僧院の一つタシルンポ僧院の座主である(四大僧院は他にガンデン僧院、デブン僧院、セラ僧院)。
- (12) C2N, 3b-5a。
- (13) アムドすなわち現中国の行政区画でいうところの青海省、四川省、甘粛省の方面でゲルク派のチベット仏教僧になるには、まず地元寺院に入り、その後、チベットに留学する場合は、デブン僧院のゴマン学堂で出身地域ごとに分けられた寮に入り修行生活を送ることになる。その後はチベットに留まる者、地元に戻ってゲルク派系列の末寺を建て布教活動をする者と様々だが、少なくとも高僧と
- 呼ばれる者はこの道筋に沿っていなければならない。石濱[2011]参照。
- (14) C2N, 6a。
- (15) 『五台山一百零八寺』三四頁、新藤[2017]。
- (16) ジェブツンダンパ||ロサン・テンペー・ギェルツェン(rje btsun dan pa||blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan, 一六三五―一七三三)。ハルハの王侯トシエート・ハーンの息子であり、チベット仏教僧としても民衆から尊崇されていた。
- (17) ガワン・ロドツウ・ギャンツォ (ngag dhang blo gros rgya mtsho, 一六三五―一六八八)。
- (18) C2N, 12a-12b。
- (19) C2N, 12b-13a。
- (20) C2N, 15b-16a。
- (21) 池尻 [2013] pp.126-127。
- (22) 池尻 [2013] pp.129-130。
- (23) C2N, 18a-18b。
- (24) 池尻 [2013] pp.132-135。
- (25) 岡田 [2016] p.266。
- (26) C2N, 23a-23b。
- (27) 黒龍、海純良 [2008]。
- (28) 新藤 [2017]。
- (29) 実に一七二〇年代のことである。
- (30) 「dpa bo'i lo」は直訳で「英雄の年」となり、厳密には「庚辰年」のことを意味しない。しかし、引用部が「己卯年」

- と「辛巳年」に挟まれているため「庚辰年」の話と判断した。
- (31) 仏像の中にタラハを封入すること。
- (32) *dpā' bo'i lo la dgon klung chos sde cher// cho 'phrul smon lam chen mo glong theb bskur// gong mas bzhangs pa'i rigs gsum ngon poi sku// 'jam dbyangs gnas mchog ri bo rtse lnga ru// sbyan drangs gzungs gzbug 'bul dang rab gnas la// gong mas mngag pa ji bzhin rtse lnga ru// song nas de rnam bsgrub ring gnas mjal la// phyin dus ya mtshan 'ja' 'od sna tshogs mthong// gnas la dad dang nyams dga'i snang ba shar// (C2N, 23b)*
- (33) 『五台县志』第五編宗教志、第一章佛教、第二節組織管理
一、管理機構、五八三頁。
- (34) 『五台山一百零八寺』七二頁。
- (35) 張元 [2011] 一一二頁。
- (36) 肖雨 [1999] 『老藏丹巴及其《清涼山新志》』『五台山研究』
- (37) シャブニンとは、直訳では足 (zhabs) を堅くする (brtan) であり、何時までもその場所 (この世) に留まるところをほし、すなわち長生きしつづけること、長寿の願いを込めた儀式のことをいう。チベット仏教の世界では目上
の者に対して必ずこれを行う。
- (38) *khyu mchog lo la har chin gyi gum// byams pa bkra shis zhes bas gong ma yi/ zhabs brtan ched du rten bzhangs mang po zhiig/ mdzad pa'i gzungs gzbug rab gnas byed pa por// gong mar zhus te bos pa'i sar*
- phyin te// de rnam bsgrub cing kung gis gtso byas pa'i// yul de'i dpon po dpon mo mi bzang dang// bla ma bisun skya sde mang thams cad la/ dbang khrid lung dang dge bnyen rab byung sogs// gang la gang dgos so soi 'dong sbyar byas// (C2N, 24a)
- (39) 石濱 [2011] 一六九頁。
- (40) C2N, 24a-24b。
- (41) C2N, 24b。
- (42) C2N, 26b。
- (43) *skabs shig nad bab lcibs bro 'tshal bar// gzhi dang byes nas 'dus pa'i dge 'dun dang// dpal bzang ka bcu la sogs rgyun pa yi// zla bo mang mas rje drung rin po che'i// thugs dam brtag par bab pa'i sku rim la// brtson pa mdzad cing shes dar lhan rgyam gnyis// 'khris su bsdad nas bro gyog 'phrod rten dang// shes dar pa yis rim 'gro la sogs pa'i// bkod pa'i khur 'khyer shin du brtson par byas// rnam rgyal ka bcu gong ma'i sku zhabs su// song nas zhus par sman dang sman pa rnam// bka' drin bskyangs pas nang las legs par grol// (C2N, 24b)*
- (44) 無上ヨーガ・タントラ『ヴァジラバイラヴァ』(大威徳金剛タントラ／jigs byed)』に基づいて灌頂。ゲルク派がツォンカパの教えに従って重んじている灌頂の一つ。他に『グヒヤサマーシヤ(秘密集会タントラ／gsang sngags)』『チャクニサンヴァラ(勝樂タントラ／bde

- mchog)』があり、三つの灌頂の頭文字を合わせて「サン・チ・シク・ノム (gsang bde jigs gsum)」と称される。
- (45) C2N, 26b°
- (46) bstan pai rtsa ba gzhi gsum phyag len btsugs// dge 'dan mams la rgyun par nyin re bzhi// ja tshul thug tshul gnyis po bla brang nas// g'long yang smon lam dhyar gnas lnga mchod dang// ja thug skol pai shyin b'lag gzhan byung tshel// de yi do dam byed dam nam phugs su// phan par bsan nas spyi soi gnyer pa gnyis// bskos te spyi rdzas thebs su rta pho rgod// b'gya dang nyi shu ra lug sum b'gya dang// gos dar kha b'lag snod spyad mgron gdan sogs// 'phran bu 'kho bai yo byad dum dang// rta phyug 'tsho bai mi tshangs gcig dang boas// lha khang tshags par boas pai mchod thebs sbyar// (C2N, 26b)
- (47) C2N, 26b°
- (48) C2N, 27a°
- (49) いわゆるダライラマという称号が成立したのは「三世」からである。一五七八年、当時のモンゴルの有力者アルタン・ハーンとチベット仏教ゲルク派の高僧ソナム・ギャンツォが青海で会見し、その際にアルタン・ハーンが贈ったソナム・ギャンツォの称号が「ダライラマ」であった。「ギャンツォ」はチベット語で「海」の意味があり、「海」はモンゴル語で「ダライ」である。そして「ダライラマ」を正統なものとするため、転生をツォンカパの弟子の一

人にまで遡ってソナム・ギャンツォを「ダライラマ三世」としたのである。

史料・文献

- 『チャンキヤ二世自伝』
- ngag dbang blo bzang chos ldan, *lcang skya II* (1642-1714), ngag dbang blo bzang chos ldan bzang poi rnam thar, gsung 'bum Volume 2, pp.447-518, Peking, 19th cent. (WIKI1321, www.tbrc.org) *文中略号はC2N°
- 『清涼山志』(乾隆二十年重刊本・民国郭恕君鉛印本・民国三二年蘇州弘化社鉛印本)
- ↓杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』(第二輯第二九冊 二二八・二二九、明文書局、一九八〇年)
- 『清涼山新志』(老藏丹巴重編、康熙四十年武英殿刊本)
- ↓杜潔祥 主編『中國佛寺史志彙刊』(第三輯第三〇冊、丹青圖書、一九八五年)
- 『五台县志』(趙培成主編、山西人民出版社、一九八八年)
- 崔正森『五台山佛教史』(山西人民出版社、二〇〇〇年) *文中略号は、崔正森 [2000]°
- 『鎮海寺佛教簡史』『五台山研究』二〇〇三年四期
- 崔正森主編『五台山一百零八寺』(山西科學技術出版社、二〇一〇年)
- 張元『格魯派在五臺山的發展』(碩士學位論文、西藏民族學院、

二〇一一年）*文中略号は、張元 [2011]。

肖雨「老藏丹巴及其《清涼山新志》」『五台山研究』一九九九年

二期

秦永章「二世章嘉活佛及其政治活動述略」『中央民族大学学报

哲学社会科学版』一九九九年

全榮「阿旺羅桑却丹生平叙補」以《SUBUD ERIKE》為基礎史料」

『内蒙古社会科学』二〇一六年

高亞利／劉清波「多倫匯宗寺的興建及其演變」『文物春秋』

二〇〇四年

黒龍／海純良「喀爾喀蒙古附清後述」『滿族研究』二〇〇八年

石濱裕美子『清朝とチベット仏教―菩薩王となった乾隆帝―』（早

稲田大学出版社、二〇一一年）

*文中略号は、石濱 [2011]。

池尻陽子『清朝前期のチベット仏教政策―扎薩克喇嘛制度の成

立と展開―』（汲古書院、二〇一三年）

*文中略号は、池尻 [2013]。

岡田英弘『大清帝国隆盛期の実像―第四代康熙帝の手紙から

1661-1722―』（藤原書店、二〇一六年）

新藤篤史「清朝前期の五台山におけるチベット仏教」『綜合佛教

研究所年報』（三九、二〇一七年）

*本稿は平成二九年度高柳基金特別研究奨励費の成果の一つである。

清・康熙期のチベット仏教導入